



扇屋の商号「地紙一」

旧伴家

旧伴家住宅は、江戸時代初期の豪商「伴庄右衛門」が本家として建てた商家です。

伴庄右衛門家の屋号は扇屋といい、商号として「地紙一（じがみいち）」を使用しています。畳表、蚊帳、扇子、麻織物を中心に商売を行い、大阪や京都にも出店を持ちました。やがて江戸の日本橋にも大店を構えるようになり、為替業務や大名貸しもしていました。

五代目の資芳（すけよし）は質素・儉約・勤勉を旨として商売をしていましたが、文化芸術にも深い造詣を持ち、若くして隠居し、伴蒿蹊（こうけい）と称して江戸中期を代表する歌人、国学者として道を究めました。当時のベストセラーとなった「近世畸人伝」の編集において伴蒿蹊の名を馳せました。

今に残る旧伴家住宅は七代目の能尹（よしただ）が、江戸時代後期に十数年をかけて建築したと言われています。当時としては珍しい、三階建ての極めて規模の大きい建物で地震に堪える堅固な建物を目指して建てたという記録が残っています。

隆盛を誇った伴家でしたが、江戸時代の末期から急速に家運が衰えて明治期になると商家をたたみ、現在は子孫も途絶えています。

建物の歴史

明治以降は八幡役場や学校、図書館として地域の人々に親しまれ、平成16年4月からは明治期の学校と同じ状況に復元・整備され、公開されています。

昭和14年、八幡商人の西川庄六氏（メルクロス株式会社）が設立した財団法人八幡教育会館の所有となり、市民の文化や教育のために活用する目的で長らく近江八幡市に無償で貸与されていましたが、資料館の指定管理者制移行に伴って、平成24年より公益財団法人八幡教育会館が管理と運営を行っています。



八幡西小学校時代



近江八幡図書館時代

近江八幡市指定文化財

旧伴家住宅

（公益財団法人 八幡教育会館）

● 開館時間
9:00～17:00（入館は16:30まで）

● 休館日
月曜日、祝祭日の翌日、年末年始
（なお、3・4・5月と10・11月は無休）

● 入館料

	一般	小・中学生
個人	400円	250円
団体（10名以上）	350円	200円

● 資料館・旧伴家住宅 共通入館券

	一般	小・中学生
個人	800円	400円
団体（10名以上）	700円	300円



〒523-0871 滋賀県近江八幡市新町3丁目15

TEL / FAX 0748-32-1877

近江八幡市指定文化財

旧伴家住宅

公益財団法人

八幡教育会館

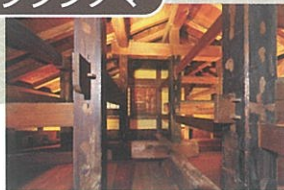




登り梁

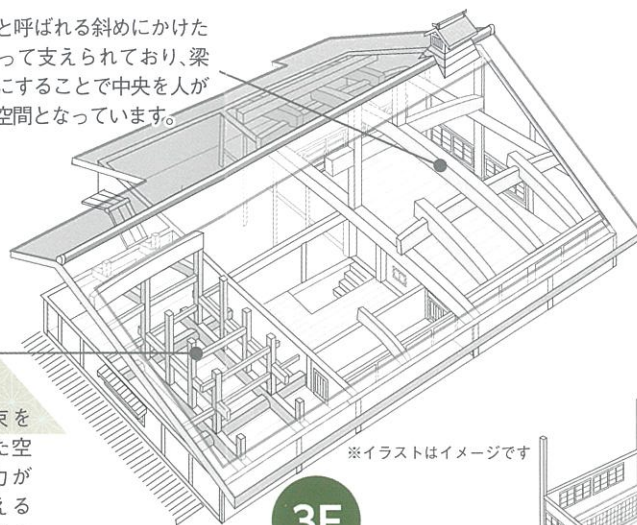
登り梁と呼ばれる斜めにかけた梁によって支えられており、梁を斜めにすることで中央を人が歩ける空間となっています。

ジシンノマ



水平梁の上に束を立て、貫で固めた空間は一見耐震力があるように見えるため、「地震の間」と

されていますが、実際には中央部には貫の通されていない部分があり耐震構造とは言えないものです。他にも江戸時代には町内を見回り、不審者を捕まえ、火の番も行う自身番と呼ばれる人がいました。旧伴家住宅の窓からは八幡の町並みの北半分を自身番が見渡すことができたため、「自身の間」ではないとも言われています。



※イラストはイメージです

3F

【限定公開】

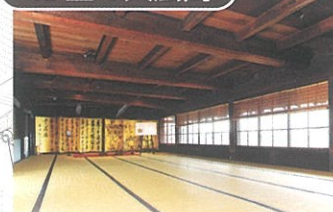
旧伴家住宅は、江戸時代の八幡町の中でも一等地であった京街道と新町通りの角地に、文政十年(1827)から天保十一年(1840)にかけて建てられました。

江戸時代は町家の建築に制限があり、基本的に二階建ては禁じられ、梁の長さも三間前後に規制されていました。

こうした厳しい家作制限がある中、三階建ての豪快な構造をした建物を造ることができたのは、当時の八幡商人の力によるものと考えられます。



45畳の大広間



約5.4m(幅3間)、奥行きは7間半あります。柱や梁も太く、窓の上部を支える梁は7間半の長大なものです。幅の広い窓がつき、明るく広々とした空間になっています。

3階の屋根裏に達する吹き抜け

見上げると煙出しからかすかな明かりが見えます。

左義長

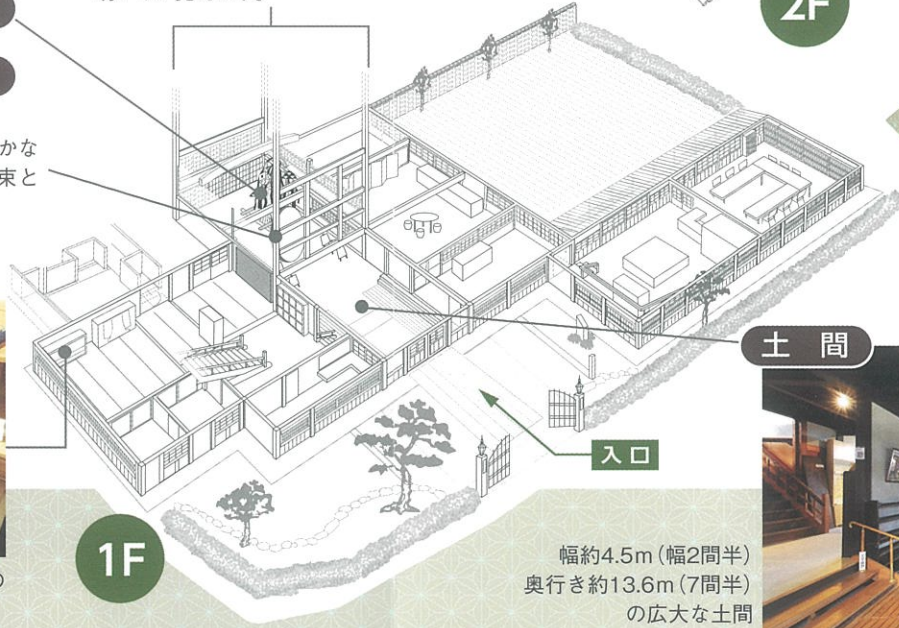
約40 cm角の大黒柱

3階の屋根裏までのび、高さ約70cmの胴差しや、ゆるやかな曲線を描く丸太梁など直線の束と貫で構成された大空間です。

小物の展示



八幡の伝統工芸等の着物の端切れを使った小物



1F

入口

幅約4.5m(幅2間半)
奥行き約13.6m(7間半)
の広大な土間

2F



通信使瓦人形

朝鮮通信使と豪華な昼食の膳



細工袋と手鞠(1F/小物の展示)



土間

